

小牧総江子さんを送る

森 沢 正 昭 (臨海実験所)

小牧総江子さんは昭和45年に理学部付属臨海実験所に着任され20年余にわたって事務官、事務室主任として臨海実験所の運営の中心として忙しい毎日を過ごされてきました。そして今年3月東京大学を定年退官されます。

臨海実験所は1886年の創立以来、東京大学の施設としてだけでなく全国の共同研究、教育の場としての役割を果たしてきました。したがって、ゆっくりと時間が流れている三浦半島の先端にあるリゾート地にある施設、という一般のイメージとはかなりちがうかなり忙しい場所です。正月の休みがあけるとすぐに理学部動物専攻3年生の臨海実習が始まり、植物専攻、教養学部、農学部水産学科とつづき、そのあいだに20~25の関東近辺の国公立大学の臨海実習がはいります。そのほかに全国の大学、研究所から研究者、学生が生物の採集や、研究のために訪れ、年間の利用者の数は、延べで7000人を越えます。そのため、事務官としての会計、庶務などの通常の業務のほかに、それらの申込の受け付けから人数の確認、宿泊の世話、その他もろもろの雑用をこなさなければなりません。実習が始まると生活の一般のことばかりでなく、怪我、病気、時には救急車の手配ということもあるわけで、相当忙しい毎日であったと

いえます。そのほかに実験所の特殊性として漁業組合を始めとする地元および県や市との対応と交渉という仕事もあるわけです。そのような忙しい毎日を朝は8時半前に登庁し、まず事務室の掃除から始めて、てきぱきと仕事をかたづける姿には頭の下がるおもいでした。また、そのやさしい人柄は実験所を訪れるすべての人々にとってのオアシスであり、臨海実験所の良さを十分に引き出してくれた人でもありました。新しい研究棟が昨 autumn に竣工し、大学院生の数もふえ、三崎の研究活動が年毎に活発になってきた陰には、小牧さんの力がおおいに働いたと感謝しております。

実験所には古びたノートがあります。ここを訪れた人びとが思い出をつづった実験所の歴史の証人なのです。そこには日本女子大学臨海実習、小牧総江子と万年筆でしっかりと書かれてあります。小牧さんの三崎とのかかわりはこの20年ではなかったわけです。小牧さんの帰国されたときは必ず臨海実験所を尋ねてください。記念に植えたハンカチーフの木が待っています。私たちも心よりお待ちしております。小牧さんは今年の6月からアメリカに渡り新しい仕事を始められます。ご健康に御留意されて御活躍下さい。ながい間大変ありがとうございました。